Kyoto City Child Rearing Support Center Kodomomiraikan

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
研究・研修だより

かがやき

Vol.63
2021
9月

令和３年度 第３回，第４回共同機構研修会

令和３年６月 14 日(月)
令和３年６月 23 日(水)

保育場面における発達特性の理解
～子どもの困りを理解しよう～

講師　岡崎 達也
(公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当

特性のある乳幼児の子どもたちの，気になる行動について，事例をもとに考えていきます。乳児期では，朝保護者と離れるときや遊びが終わるとき激しく泣いてなかなか泣き止めない，うろうろして遊びが見つからずおもちゃのカゴをひっくり返す，常に何かを口に入れている，呼びかけても視線が合わないなどの姿が見られます。幼児期では，自由遊びのとき，手持無沙汰で友達の気を引きたくてちょっかいをかけトラブルになる，友達の作ったものを壊したり取ったりする，話し合いの場面で，先生の話に逐一反応してずっと何かを話しているなどです。もともと子どもにはこういった姿が見られますが，発達特性からきていることも多いということを知ってください。

次に発達特性について六つの視点で話をします。一つ目は，注意・多動衝動です。シングルフォーカスと言って全体が見られず，一部分を狭く深く捉える特性があります。多動性では，動きが止まらない，落ち着きがない，また話が止まらないこともあります。衝動性は何かを見るとやりたくなって止められないという特性です。二つ目は感覚特性で，様々な感覚（視覚，聴覚，臭覚，味覚，前庭覚，触覚，固有覚）において過敏性や鈍麻性が極端に出て，生活の中で困りを感じます。三つ目は協調運動，力加減や手先の細かい動きなどがうまく調整できません。四つ目は想像性で，見通しが持ちにくい，段取りが組めない，相手の気持ちがくみとれないといったことが出てきます。五つ目は社会性で，相手の気持ちがうまく把握できず人との距離がうまく保てません。人との距離のとり方には積極奇異型（相手との距離が非常に近い），孤立型（周りのことを気にしない），受動型（一見大人しく言うことに従っているが本人は状況がつかめず不安が高い）があり，どのタイプかによって支援を考えます。最後がコミュニケーションです。思いをうまく伝えられず，話がかみ合わなかったり，ヘルプコールが出せず固まってしまいます。言葉以外の方法でも，うまくヘルプコールが出せるような支援が必要です。

子どもの気になる行動の原因に，発達特性があるかもしれないと考える必要があります。特性があっても，生活環境を整え，周りの大人や子どもの関わりが適切であれば，個性として社会に適応していけます。こじれると，メンタルヘルスの問題も出て来て医療的な介入も必要になります。発達特性があっても，そこに適応上の問題が起きなければ発達障害と考える必要のない場合もあります。乳幼児に関わる私たちが，気になる行動には必ず意味があると捉え，子どもが混乱しないように環境を整備したり，その子の特性を理解し良いところを見つけて具体的な支援を考えることが大切になってきます。特性があることで他の人にはできないことができるということもあり得るのです。

＊上記の要約は，講義をもとに編集したものです。

DVD貸出中

園庭の身近な自然が保育を変える～命の感じる園庭～

講師　小泉 昭男　小泉造園代表

遊びは子どもにとって一番大事なものだと考えます。今，実体験が希薄だからこそ子どもが育つ場所である園の環境を見直すべきだと考えています。子どもが目を輝かせる遊びが繰り広げられる園庭環境が必要です。乳幼児期にしかできない遊びの中で，非認知力（やる気，自信，忍耐力，計画性，協調性，粘り強さ，観察力など）が生まれ育まれると言われ，遊びの大切さが世界的に認められてきています。園庭にあるものはすべて遊びの要素だと考え，身近で手の届くところにある自然を豊かにしていくことが大事だと考えています。園庭の周りに植栽するのではなく，子ども達のふれ合う所にすれば，植物採取，木登り，かくれんぼ等，遊びが大きく広がります。ドングリ，フジの実（おはじき），ムクロジの実（シャボン遊び），おじぎ草などの遊びの要素を持つ植物を植えることでも遊びの環境が豊かになります。キャラクターの遊具ではなく，自然物を置くことで様々な物に見立てイメージが広がります。

また，園での畑や田園づくりを考えたとき，収穫が第一ではなく，命をいただくことや，自然を感じることを大事にしてほしいと考えています。収穫までに様々な生きものが関わっていることなどに興味関心を持てる仕掛けをしてください。命を大事だと感じるには，たくさんの虫にふれ，たくさんの花を摘み，たくさんの命に出会い関わる経験が必要です。乳幼児期の命や死を感じる体験から子どもは命の尊さを感じることができると考えています。

失敗しても大丈夫という場で，子どもが自由な発想で遊びを展開する，そんな乳幼児期の体験がその子の将来を左右することもあります。デジタルな体験で子どもを満足させるのではなく，身近な自然の中で実体験をさせてください。

子どもには答えを教えるのではなく，問いを探してください。子どもが興味を持つには，遊びが大事です。好きな物を見つけられれば，遊びの中で主体的に学ぶことが出来ます。子どもにとって大切なのは，大人に教えてもらい受動的に学ぶことよりも，自ら興味を持って関わり「なぜだろう」とのめりこんで考えること，これが学びにつながるのです。

五感は，子どもの時に自然や植物・身近な生き物に触れ，様々な感覚を通して“感じる”ことで研ぎ澄まされます。そのためには，子どもがいろいろなことを感じられる環境と共感する大人の存在が大切です。多様な環境の中でなら，子どもはしっかりそれらを取り込んで成長します。そして，近くにいる大人がその不思議さやおもしろさに気付くふりをして子どもの好奇心・探求心に火をつけます。想定外の行動をとるのが子どもです。その子を認め行動の見方を肯定的にすると一人一人の姿が豊かに見えてきます。子どもが遊びの中で自然を感じながら，様々な発見をしたり，達成感が味わえるよう，遊びを見守ったり言葉をかけるのが皆さんの役割です。

＊上記の要約は，講義をもとに編集したものです。

子どもを育む喜びを感じ，
親も育ち学べる取組を進めます。

［京都はぐくみ憲章］より

「はぐくみ文化」を未来の京都へ

この印刷物が
不要になれば
「雑がみ」として
古紙回収等へ！

発行日　令和3年9月6日
発行者　京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883　中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel ： (075)254-5001　Fax ： (075)212-9909
URL ： https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/